

9 研究の成果と課題

分析は、授業における推敲前後で「を格」の誤使用と欠如、誤用法を評価し比較した。また、自作のプレテストとポストテストを実施し、他動詞構文と「つくる」に関する動詞を使用した他動詞構文の評価を比較した。さらに、「つくる」に関する動詞の使用を比較した。

その結果、推敲後は、推敲前に比べて「を格」の誤使用と「を格」の欠如の低下が示された。「を」の欠如と「を格」の語用法については、低下が示されなかった。これらのことから、「を格」の欠如文を示し、「を格」を挿入する指導は、子供の推敲を促し、子供は「を格」の欠如文に対して、「を格」を挿入したと考えられる。一方で、「を格」の欠如は、推敲後に低下したことが示されなかったが、これは、分析対象の人数が影響を及ぼしている可能性がある。「を格」の誤用法の低下が示されなかったことから、「を格」の欠如文を示し、「を格」を挿入する指導は、「を格」の欠如の低下に対しては有効であるが、「を格」の誤用法に対しては有効に働いていないことが示唆された。

プレテストに比べて、ポストテストは1文当たりの「を格」の誤使用と1文当たりの他動詞の誤使用が低下したことが示された。また、「つくる」に関する他動詞構文の「を格」の誤使用が低下したことが示された。他動詞の誤使用は、低下が示されなかった。さらに、「つくる」に関する動詞の使用が上昇したことが示された。加えて、「つくる」や「ひねる」の正答率が上昇し、「つむ」の正答率は上昇しなかったことが示された。これらのことから、子供の「を格」の適切な使用と他動詞の適切な使用に、本単元が有効に働いたことが示唆された。森川（2018）が指摘する「書き言葉」につながる遊びや生活として、単元に図画工作「ごちそうパーティーをしよう」の粘土遊びを位置付けたことが、言葉の自覚化を図り、「を格」や他動詞の適切な使用に有効に働いたと考えられる。また、本時において、「を格」の欠如文を示し、「を格」を挿入する指導が児童の「を格」の適切な使用についての理解を深めたことが示唆された。さらに、指導は、単元において記述した手続き的説明文とともに、子供の日常生活における文の産出にも影響を及ぼしたと考えられる。他動詞の誤使用については、サンプル数が影響を及ぼしている可能性がある。加えて、本単元前に比べて、子供は「つくる」「のぼす」の他動詞を適切に使用できるようになったことが示唆された。「ひねる」「つむ」については、サンプル数が影響を及ぼしている可能性があるが、「つくる」「のぼす」「ひねる」「つむ」の動詞の適切な使用状況を踏まえると、本単元前に比べて、子供「つくる」に関する動詞を適切に使用することができるようになったことが示唆された。小学1年生は、動詞の分化の最中にあり、本研究において、「つくる」「のぼす」（「ひねる」「つむ」）の正答率の上昇は、「つくる」の習得とともに「つくる」に関する動詞の分化を促したことが示唆された。これらの他動詞の使用と「を格」の使用が相互作用し、それらの適切な使用につながったと考えられる。

10 次年度への展望

今後は、「を格」の誤用法を低下させる指導方法についての検討が必要である。「を格」の誤用法を例示し、推敲することが有効に働くと考えられるが、詳細な検討が必要である。

本研究では、「新たな価値を創造する力」の育成に向けて、「基礎的リテラシー」に焦点を当てて、対象を表す「を格」を使用して、「つくる」に関する他動詞を修飾することを活用しながら、一文の意味が明確になるように語と語との続き方を考え、記述する子供の姿を目指した。

基礎的リテラシーの発達を促すためには、「を格」とともに、「は格」「に格」「へ格」等のその他の助詞、それに関連する動詞の適切な使用の技能を高める指導方法を明らかにする必要がある。また、それらの技能を複合的に高める単元や年間の指導計画について検討を加える必要がある。